

## P『思想の政治学——アイザイア・バーリン研究』を読む ——リベラリズムという言語行為をめぐって

世話人：井上 弘貴（神戸大学）

報告者：森 達也（早稲田大学任期制講師）

討論者：乙部 延剛（茨城大学）

### <当日の流れ>

本セッションは、英国の政治思想家であるアイザイア・バーリン（Isaiah Berlin, 1909-1997）の包括的な研究書として刊行された森達也著『思想の政治学——アイザイア・バーリン研究』（早稲田大学出版部、2018年）〔以下、『思想の政治学』ないしは本書〕の書評セッションとしておこなわれた。参加者はのべ35名であった。

本セッションでは、世話人からの手短な趣旨説明のあと、まず討論者である乙部会員が『思想の政治学』の内容を紹介する報告を20分おこなった後、引き続いて乙部会員が『思想の政治学』についての内在的なコメントを30分程度で、スチュアート・ハンプシャー、ジュディス・シュクラ、アヴィシャイ・マルガリート、リチャード・フラスマンといった論者にも言及しつつおこなった。以上の乙部会員の内容紹介とコメントを踏まえて、『思想の政治学』の著者である森会員が、著書出版以降の自身の関心をこめて、「アイザイア・バーリンと政治的リアリズムの潮流」と題した報告を40分程度でおこなった。その後、フロアに開いて質疑応答をおこなった。

### <乙部会員の『思想の政治学』紹介とコメント>

乙部会員は『思想の政治学』の紹介として、本書がバーリンの多様な側面を通覧したうえで、その統合的理解を試みるものであることを示しつつ、「品位」の観念を中心とするかれの自由主義と、ナショナル・アイデンティティの核心をなすシオニズムの理念との相克としてバーリンの政治思想は把握できる、という本書の結論を確認した。

引き続いて各章の概要を紹介したうえで、乙部会員は以下のことを確認した。すなわち、バーリンの政治思想の中心の特徴は、(1) 価値多元論、(2) 人間主義あるいは世俗主義（人間の悲劇的側面の承認と、差異の積極的な肯定）、(3) 歴史主義、(4) 「品位ある社会」の構想に示されるミニマリスト・リベラルの立場である。そのうえで、バーリンの自由主義は英米圏の主潮流とは異なるものであること、すなわち、自然権論でも社会契約論でもなく、功利主義でもなく、自由市場や最小国家の擁護でもなく、自由の優先順位を決めるものでもないこと。それゆえに、知的リソースおよび立場の点で類似性があるのは、シュクラ、グレイ、ハンプシャー、ウィリアムズ、イグナチエフ、マルガリート、ラズ、ローティ、コノリー、ウォルツァー、フラスマンといった論者であること。以上のことを乙部会員は確認した。

以上の紹介を前提として、乙部会員からは引き続き、本書についてコメントした。まず本書の思想史的背景として乙部会員は、上記の紹介とも連動しつつ、「コノリー、テ

イラー、ローティなど、価値多元論ないしはそれと親和的な政治思想を説いた思想家たちを通覧する文脈」をバーリンがもたらしてくれることを示唆し、とくに、日本ではほとんど言及されることのないものの、コノリーが最初期から一貫して言及してきたスチュアート・ハンプシャーがバーリンに与えた影響について指摘した。

つづいて乙部会員は、バーリンにおける価値多元論と自由主義の関係について論じた。バーリンは価値多元論から自由主義を導くことはできないと主張するものの、自由主義はまったく無根拠であると考えたわけではなかった。乙部会員によれば、バーリンにとって「準根拠」と言えるものとして本書が示しているものが、第一に「現実感覚」であり、第二が選択の自由と責任の概念、第三が「人間生活の悲劇的側面」、すなわち「諸価値の衝突によって特徴づけられる日常的経験の世界」への「肯定」であった。

とくに第一の「現実感覚」、すなわち「自由主義は幾多の存続可能な政治的伝統のひとつにすぎないかもしれないが、その中で自己を形成し、かつ現に生きているわれわれの伝統でもあるという意味では、他に比類のないものなのである」という感覚に基づくバーリンの自由主義に、本書がローティの自由主義との類縁性を見出していることを乙部会員は確認した。

ただし、乙部会員は、本書で描かれるアフマートヴァへの態度を取り上げ、ここにはローティ的なアイロニーは乏しいことを指摘した。そのうえで乙部会員は、本書における以下の一節、すなわち「自由と責任という社会的実践のラディカルな偶然性を自覚し、にもかかわらずそれをわがものとして引き受け、実践すること」という、バーリンの立場表明を描いた箇所を引用し、ここでの重点が「にもかかわらず」にあることを指摘した。

この「にもかかわらず」から帰結するのが、「人間的生活の悲劇的側面」や自己の肯定であり、乙部会員はコノリーを念頭に起きつつ、この肯定はいわゆるリベラルな個人の肯定というよりも、ニーチェの運命愛に近いものではないかとの問題提起をおこなった。さらにここから乙部会員は、今日の政治理論においてトピックのひとつになっている「反基礎づけか、ポスト基礎づけか」という対立軸へと議論を展開させ、バーリンの立場はローティのそれよりも、多元的な世界への感性およびニーチェの「運命愛のようなもの」としての「意志と英雄主義」を説くジェイムズのほうに近いことを示唆した。

乙部会員は最後に、本書がバーリンのなかで重視する「品位の政治」をめぐるコメントをおこなった。乙部会員によれば、「品位ある政治」が属する「消極的な政治」の系譜には、シュクラーの「恐怖の自由主義」、ジェイコブ・レヴィの「恐怖の多元主義」、アヴィシャイ・マルガリートの「品位ある社会」および「妥協」の政治学、イグナティエフの「まだましな悪」アプローチなどがある。

だが「品位の政治」は、非リベラルな社会でも実現可能であることが本書では示されており、そのためにバーリンの政治構想がリベラルなものとなるためには、他の側面が必要である。そのような他の側面が、「アイデンティティの深い分裂と偶然性を是認することを通じて自己を肯定する道」である「リベラルな善」の構想である。乙部会員にしたがえば、あるいは本書自身が触れているように、そのような自己の肯定は、コノリ

一的な闘技的個体およびアゴーンの敬意のビジョンに接近していく。ただし、バーリンの場合においては、シオニズムに対するコミットメントを通じて、ユダヤ人がマジョリティでいられる社会を追究する点に特徴があり、また、コノリーのいう「多元化のエートス」のような差異を尊重する道徳的姿勢が「普通の人々」の間に浸透する可能性について悲観的であった点を乙部会員は確認した。

そのうえで乙部会員は、リベラルな善の構想がバーリンの消極的自由とどのように結びつくのかを理解する鍵として、**willful liberalism** を展開するリチャード・フラスマンの議論を紹介し、個体に重きを置くフラスマンのような議論の方向とバーリンの立場との類似性が示された。

#### < 森会員の報告 >

以上の乙部会員の紹介とコメントを踏まえつつ、森会員は応答のかわりとして、「アイザiah・バーリンと政治的リアリズムの潮流」と題した発表をおこなった。森会員はこの発表を独立した論文としてリライトする予定があり、ここではその手短な要旨のみ記載するにとどめる。

森会員の報告は、近年の政治理論において分析的政治哲学にたいする批判的応答としてなされている政治的リアリズムの諸理論と、乙部会員のコメントのなかでも言及がなされたバーリンの「現実感覚」との類似点と差異を浮き彫りにすることをつうじて、バーリンの政治思想の今日的意義をあらためて再検討するものであった。

森会員はまず、バーナード・ウィリアムズ、レイモンド・ゴイス、ジェレミー・ウォルドロンそれぞれの議論を紹介し、近年において政治的リアリズムと総称される論者たちが重視する論点を明らかにした。そのうえで、森会員はそれら論点をバーリンの主張の要点と突き合わせ、双方の類似点と相違点を検討した。この検討をつうじて森会員は、非理想主義的なリベラリズムという、リベラリズムの別様のプログラムを推進していく可能性を示唆した。

#### < 質疑応答 >

おもに山岡龍一会員と王前会員から質問がなされた。山岡会員からはまず、バーリンがそもそも、どこまで品位ある社会にこだわっていたのかという疑問が出された。そのうえで、アフマートヴァにたいするバーリンのきわめて「ウェットな」態度をみても、バーリンにおけるロマン主義を論じる必要、言い換えれば、暴走することのない生の肯定について検討する必要を山岡会員は強調した。王会員からも、バーリンにおけるロマン主義をもっと強調してもよかったのではないかというコメントが出された。そのうえで王会員は、バーリンはカール・シュミットを読んでいたことを語らないが、シュミットやハイデガーとバーリンとの関連を探ることの可能性に言及した。フロアからはさらに、丸山眞男との比較へと、バーリン研究を展開させる可能性についても発言があった。

(文責 世話人)